

古寺浄瑠璃寺の 思い出  
中津市 梶野 敬子

この秋、山深い朝地町の白岩山西蓮寺様での1日研修会に参加させていただきました。別府駅から車に同乗させていただき、高速道を走り、山道を越えてお寺様にたどり着きました。暖かい御接待をいただき、御法話を聴聞することが出来ましたこと、有難く深く心に残る1日でした。さて、今から30年程も前のことです。娘が奈良に居たものですから、奈良の古寺をたずねてまわりました。奈良に近い京都のはずれの古寺浄瑠璃寺のことです。浄瑠璃寺は、九体寺の別名を持ち、当尾と呼ばれる丘陵地に国宝の堂塔を構えている古寺です。南北に細長い仏殿に金色の阿弥陀如来像が九体も横1列に座っている姿は圧感というよりも心の底から頭が下がり静かに座して、その前を離れるのを忘れる程でした。しばらくして、徐々に緊張もほぐれ、安らぎの気持ち膨らんで来ますと、ふと目元が濡れてい

ることに気がつきました。境内は、特別名勝・史跡の浄土庭園で、園池を挟んで西に本堂の九体阿弥陀堂、東に高さ16メートルの三重の塔を仰ぎ、(どちらも国宝とのこと)です。塔には、東方本尊の薬師如来座像(重文)が秘蔵されています。浄土庭園のある古寺として名高いお寺だそう。さて、なぜ阿弥陀仏が9体かといえますと極楽浄土への往生は、現世の生き方によって9段階(9品)あるとする経典に由来した数だそう。浄瑠璃寺の勘所は、仏像だけでなく、極楽浄土を現わした庭園や伽藍を1体で体感することが出来ること。四季折々の寺観には、九体仏に寄せた数々の仏心が宿る、そこに思いを傾けて参拝すると良いでしょう。と云われまいた。さて、仏像という実体的なものだけでなく、その「はたらき」としての側面を受けとめ、仏様を特定の場所にあるものとしてとらえるのではなく、「はたらき」としての側面も受けとめてほしい。とご門主様は、「ありのままにひたむきに」に書かれています。そのこと

を深く味わいながら、若き頃 古寺を訪れた感動を胸に、今、皆様方に導かれて歩みはじめようとしている自分がある様に思われます。

細川巖先生講話の続き

我が名号とは何か。寿命無量、光明無量南無阿弥陀仏である。この南無阿弥陀仏を聞きぬく、聞き開く、光明無量と如来の光に照らされ、照られ、照らしきられて私自身というものが本当にわかつてくる。照らされて、照らされて自己に目覚めるのである。自己を知るのではありません。そのまが如来の御命の中におさめとられて、「こういうていたらくの愚か者」「他力の悲願はかくの如きの我が為なりけり、南無阿弥陀仏」と念仏になるのである。南無阿弥陀仏におさめとられて頭をさげる。それを聞き開くという。本當に聞いたということである。如来の名号を聞きひらいて如来の心が届いてくださることが大切である。如来の真実の心、それが名号を聞きぬくと、ころにあたえられる。問題は名号を聞くという

ことにあるのです。名号というの南無阿弥陀仏である。南無阿弥陀仏はどこかにあるのではない。人が称えている、誰かが讃えている、そこにある。南無阿弥陀仏と、姿も形も見えない、捕らえようとしても捕らえられない、例えば、風のよるなみの、もしこの風が鯉のぼりに届いてこの中をふきぬけていったら、今までしょんぼりと垂れ下がっていた鯉のぼりは大きく大空を泳ぐようになるだろう。風が入ってきて風が出てゆく。風の働きが鯉のぼりをうごかしている。南無阿弥陀仏の風が入って人間に届いたところ南無阿弥陀仏と念仏する人があり、念仏をよるこんでいるお方がある。その人の教えを聞く。聞き開く。聞き開いて自分にも風が通ってくると、南無阿弥陀仏と私の念仏になる。この風はどこから来たのか、この風は私の前にいる鯉のぼりの中を吹き抜けて来た風が私の中に届くのである。親鸞聖人の信心は法然上人の信心の念仏を聞き開いて生まれた。私の念仏もよき人の仰せを頂き、その教えをその

人を吹き抜けた風が私に届いたのである。それを聞其名号(もんごみょう)という。聞其名号とはその名号を聞く。私の前のよき人のおおせを聞き開く。それを聞其名号という。南無阿弥陀仏は、そのよき人をおおして私の聞其名号となつて南無阿弥陀仏と伝わって来るのです。念仏を申すことが大事。念仏を申すのは本當は風の働きです。よ。風の働きなんだ。南無阿弥陀仏の働き、なんだ。風の働きを本當にいただいてゆくと、信力増上という。親鸞聖人は晩年になるほど南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏とつよくこの風をいただかれた。そしてそれが吹き抜けて南無阿弥陀仏の念仏になった。私達も念仏を申すことが大事です。これを皆さんにすすめたいから、私はこのため本日ここに参つたのです。一人でもよいかと云うことが親鸞聖人の御教にかなう一番大事なことです。 **おわり**



季刊

じねん

2018. 4. 1  
中央仏教学院  
通信教育同窓会  
大分支部  
NO. 105

和讃575

安らぎの報土へ

行かばや

南無阿弥陀仏

竹田市 吉岡 雄三

安楽仏土の依正は

法蔵願力のなせる

なり

天上天下にたぐひ

なし

大心力を帰命せよ

(浄土 和讃 27)

(意識)

阿弥陀仏の浄土にお住まいの仏・菩薩もその国土も宝蔵菩薩の願いによつてできたものです。その安楽仏土の素晴らしさは、他のものにくらべようがありません。このような世界をお築に

なつた阿弥陀様に、私達は心から帰命しましょう。この和讃は 阿弥陀様の浄土の素晴らしさを詠じておられます。「安楽仏土の依正は、法蔵願力のなせるなり」とあります。「依正」とあります。「依報」と「正報」のことです。「依報」とは、仏の依りどころということとで仏のいる「場所」のことです。また「正報」とは「正しい果報」ということで、浄土にいる仏や菩薩のことです。浄土も仏たちもすべて宝蔵菩薩の願力によって建立されたものですから、その尊さ、素晴らしさは全世界に比べるものがないと詠じられています。法蔵菩薩「すべての衆生救おう」「すべての人を浄土に迎えたい」という願をお建てになりました。「衆生が浄土に生ぜずば、

私達はその大悲をいただく喜びをかみしめることが大切だと思います。この和讃は最後に「大心力を帰命せよ」と結ばれます。「大心力」とは「大いなる願心を具えられた仏」の意(註釈版の脚注から)です。法蔵菩薩のすべてを救うぞという大願心力です。そういうところから「阿弥陀仏」の別名として使われます。阿弥陀様にすべてを捧げましようということ。とここでこの和讃には「願力」「大心力」と「力」が2ヶ所ありますので「力」について考えてみましょう。「力」とは常に「動いている」「働いている」ことを表わします。常に私の方に向かって働きてつづけているいることです。「本願力にあひぬれば、むなしくすぐるひと

ぞなき」です。必ず救うぞという本題は常に私に向かって働きてつづけてくださっている。その思いを私どもは大切にいただきたいと思っております。 **よき師に会う** 私が田畑先生(第2佐藤病院院長、龍谷大学大学院教授)のお話を聞かせて(月に二度大分、別府)いたただくようになりました。丸5年になりました。あの人生で一番真面目(誰もが)に生きていた時から50年経ってからの突然のことでありました。15才、20才頃、どこにいくのか? 生まれきた意味や目的は? 羅針盤もなくの港へ行く。う・か? 幼いながら、真剣に考えていたように思います。私の命は両親、祖父母、ときかのぼり何億年か前、アミーバー(生命体のはじめ)から突然変異を繰り返しながら今ここ私があるとすれば、犬、や猫と違い、何か意味があるのでは? 大いなるもの(大宇宙)の意志によるものではないか? 朝、東から日がのぼり、夕方太陽が沈んで

いく、毎日何の変化もない明日がはじまる。考えてもわからずは、なく、大学へ。マージャー、パチンコを覚え、女子と遊び、日々楽しく時間がすぎ、社会にでれば人より物や、金が多く入ることに熱中し、それが人生の目的でないのはわかっていながら、向こうの方へ押しやつてきました。そうしてなにもわかって、仕方がない、終わるだろうと思つていた時、自分がわかつてきた人、何のため生まれ、仏法を生きている人、田畑先生に出遇いました。その縁で数多くの方々に遇わせていただきました。余り時間ありませんが、前を行く人によき師にしっかりと進みたいと思つて

細川先生の御講話を私が略しに略して、大事などころを大幅に落としています。全講話のコピーが是非どうぞ。左記にご連絡下さい。097-524-6525 大分市 渡辺、山上

# 大見出しを入力します

## 小見出しを入力します

白抜き2行の  
見出しです



絵解き (キャプション)



絵解き (キャプション)

白抜きの見出しです

この枠は2行  
入力できます

この枠は2行  
入力できます